

小野 泰著

## 『宋代の水利政策と地域社会』

(汲古叢書 94)

汲古書院 二〇一一年・三刊

A5 三一六頁 九〇〇〇円

本書は、宋代の経済発展を支えた水利開発をめぐる政治、経済、社会を動態的に捉えるため、中央での士大夫の政策論、在地有力者の利害と水利政策や地域社会との関連性、および水利政策に与える影響について考察している。

第一部では宋代の水利政策において、地域社会と水利を考察する前提を記す。第一章では宋代全般の水利政策の考察には時代区分の必要があると考える著者が、北宋の二期での政策を具体的に論じる。第二章では、宋代の漕運制度を支えた大運河のうち、淮南路（特に東路）の東側を南北に縦貫する淮南運河に関して、日本と中国での先行研究を踏まえながら、国内統一と漕運制度の形成、漕運方法、淮南運河の概要とその整備を考える。

第三章では、黄河治水の問題を政策面の形成やその推移を中心に再検証する。黄河治水に関する従来の研究では制度上の課題がほぼ網羅されていることから、本章では新たな議論の展開はない。第四章では、南宋の孝宗の江南東・西路における漕運制度、圩田等の水利保全、荒政と地域社会について考察する。いくつかの事例を通して、郷党社会、特に父老の実態、胥吏層との重なりや

相違点を重要視し、政治史の中での位置づけを大きな課題として提起する。

第二部は地域社会での水利を知るために、南宋の明州と台州の二都市をとり上げる。第一章では、明州の鄞県の東錢湖と広徳湖を例に、湖田化の推進者である廢湖派と反対者である守湖（復湖）派との対立、その背後にある郷党社会、明州の有力な官戸・形勢戸の動静を考察する。第二章では、両派の対立の中で、米の生産量の増加と品種の多様化、流通の拡大により利益が増大して湖田化政策が推進されていく過程と、東錢湖での「淤葑」（葑草による湖面の淤塞）問題で水利利益権が次第に豪強によって専横される事態を見ていく。第三章では、南宋の台州黄巖県の事例を挙げて、利水面において官河改修と諸閘設置の推移、水利施設の再編と政治的・社会的問題について論じる。第四章では、台州の地理と水利の特性、州城の修築と治水対策、都市の発展と水利、州河・東湖などの整備を歴史地理的観点から考察する。

第一部、第二部ともに問題の中心となるのは士大夫の存在および彼らの認識で、水利政策や地域社会との関わりかたが関連している。北宋では新法党と旧法党との対立が、南宋では中央政府と地方の権門勢家との対立が大きく関わり、政策内容の良し悪しよりも関係者の利害が水利事業の実施に大きく影響したのである。水利政策と開発は生産量の増大に基づく経済発展だけでなく、それ自体にさまざまな政治的、社会的問題や矛盾を含んでいることが宋代の特徴であると著者は考え、人的要因の作用や影響を例証したことが本書の最大の特徴である。

(宇都宮美生)